

報告①

鞠智城の調査・研究と成果

講演者紹介

長谷部 善一（はせべ よしかず）

熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館館長。専門
は日本考古学（古墳時代）。学芸員。

平成三年熊本県教育厅に入庁。文化課、装飾古墳館、岩手県教育
委員会（併任）、文化厅（研修生）等を経て、令和四年四月から現職。

鞠智城の調査・研究と成果

歴史公園鞠智城・温故創生館館長 長谷部善一

皆さん、こんにちは。歴史公園鞠智城。温故創生館の長谷部です。本日はよろしくお願ひします。私からは、現在までの鞠智城の調査と研究の成果について報告をさせていただきます。

一 はじめに

先ほど小田先生から、鞠智城について今までどのような調査がされてきたのか、どのような方々が関わられたのか、さらに今後の課題にまでお話をいただきました。現在、鞠智城に携わっている者として非常に身の引き締まる思いです。小田先生の鞠智城へのあたたかな気持ちを感じているところでございます。

鞠智城は皆さんご存知のとおり、熊本県の北部、山鹿市と菊池市の境に位



図 1



置する古代山城です。現在はスクリーンに映しだしているように整備が進んでおり、子どもたち、地元の小学校が中心ですが、鞠智城の説明ボランティア会の方たちと一緒に鞠智城を学ぶシーンも多くみられるようになつております。（図1）

二 鞠智城と大宰府に関わる研究史（図2）

（一）鞠智城築城とTSMCの熊本進出

現在、熊本県の菊池市及びその周辺は、台湾の半導体メーカーTSMCの工場進出があり、地域自体全国から注目されるとともに大きく変わつてきている地域です。この状況は、鞠智城が千三百五十年ほど前に菊池郡と山鹿郡の境に築城された時と非常に状況が似ているのではないか、と私たち鞠智城を研究している者は感じています。

鞠智城が在るのは菊池郡の西端で、現在の山鹿市菊鹿町米原と菊池市堀切です。この山中にヤマト政権の発注で渡来系の人、百濟から来た人々の指導を受け鞠智城が築城されます。当時、人々は堅穴建物に住んでいた。そういうたどころに、城門・土壘を巡らせ、大

図2

鞠智城築城とTSMCのくまもと進出

—鞠智城築城当時と、今のくまもと—



- 菊池郡米原の地に当時、東アジアでの最先端の技術をもつ古代山城の築城。
- 築城後には“車路”官道と、後に作られる“西海道”が連結し、鞠智城と大宰府の連絡路の強化。
- 菊池郡（西寺遺跡）、山鹿郡（御宇田遺跡）、合志郡or山本郡（上鶴頭遺跡）など官衙の建設。
- 菊池郡菊陽町に世界でも最先端の技術をもつ半導体メーカーが進出。今後
- 建設後には渋滞緩和策として中九州横断道路の建設促進。
- 周囲には国内大手の半導体メーカーなど、関連施設の建設ラッシュ。

型掘立柱建物群が建築されます。菊池川流域に住んでいた人々は、非常に大きな驚きをもつたのではないかと思います。

スクリーンの右写真は、TSMCの第一工場が建設されたところです。この隣には今後、第二工場が建築されますので、更に大きな施設群となっていきます。鞠智城も、最初は狭い範囲の中で建物群の建設が始まっております。唐・新羅連合軍の侵攻に備えて、まず中枢の施設、掘立柱建物と外郭の防護施設、城門・土塁線をつくり城としての最低限の機能を整備しますが、同じようにTSMCの工場も最初は中核施設、事務所棟、第一工場が建設され、第二工場ができ次第に様々な役割が広げられていくようです。

古代においても鞠智城が築城された後に、菊池郡や山鹿郡が存在する菊池川流域において鞠智城を補完するような施設群が建設され始めます。鞠智城が官衙的な役割を担うようになつた鞠智城Ⅱ期以降、官衙的機能を補完する建物群が鞠智城の近くに相次いで建てられます。例えば、菊池郡においては、菊池郡家と想定される西寺遺跡がありますし、山鹿郡でいえば、山鹿郡家と想定さ

る方もいる御宇田遺跡が山鹿市鹿本町にあります。いずれも鞠智城から歩いて一、二時間で行ける距離のところに、鞠智城と同時期に官衙が作られていました。

さらに今回、T S M C の北側には、将来的には中九州横断道路に繋がる高規格道路の整備が始まっています。前熊本県知事の蒲島郁夫さんのときに路線が決定されましたが、九州縦貫自動車道と接続し、福岡市からも一時間以内で来ることができる道路がつくられるのです。鞠智城の時代にも鞠智城の南、菊池平野、菊鹿盆地の中に「車路」と呼ばれる、今の国道に近い官道が作られています。それが大分県と熊本県、当時の豊後と肥後、そして肥後と筑後といったところを繋いでいました。

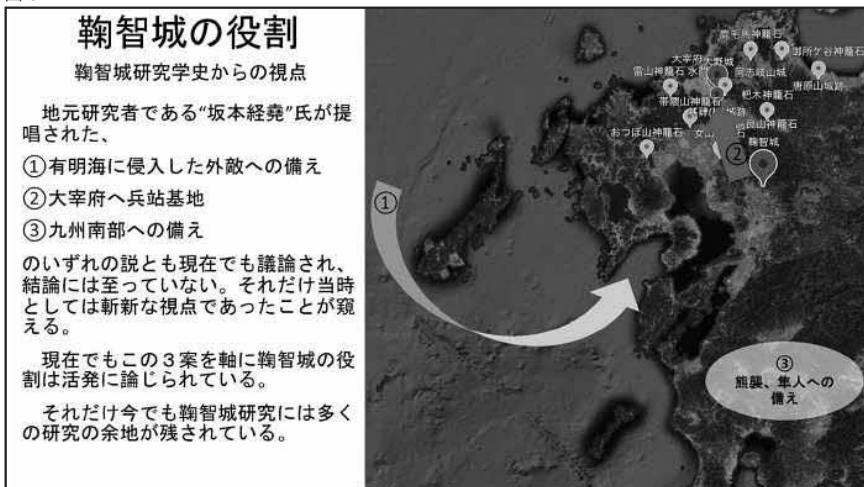
以上、現在の T S M C の進出が鞠智城築城と非常に類似しているというところを紹介しました。

(二) 鞠智城の役割

それでは資料三十五ページをお開きください。スクリーンを見ていただいても構いません。まずは鞠智城の役割というところからご説明をします。(図3)

六国史に記された鞠智城というものが、どういう城か、どこにあるのかについては江戸時代から議論がされていました。『肥後国誌』、『菊池風土記』等の書物には、鞠智城が米原よなばるの地にあるのではないかと記載があります。先ほど小田先生のお話しの中でもありましたが、昭和に入つてから地元の研究者である坂本經堯さかもとしづねたか先生が中心となつてこの地を発掘され、鞠智城の遺構、遺物を確認なさいました。その調査をもとに、坂本先生は鞠智城の

図 3



役割について三つの役割を提唱なさっています。一つが、有明海から侵入した外敵への備え、二つが、有事の際に大宰府を支えるための兵站基地、三つは、九州南部への備えです。

坂本先生が提唱されたこの鞠智城の三つの役割は、現在も鞠智城研究の基本で、この説をベースに様々な意見が先生方から出されています。資料三十五ページには、これまでの研究者の方々が提唱されている意見を集めてみました。詳しいところは、また皆さんお帰りになつてから読んでいただければと思います。

(三) 鞠智城と有明海

ここからは私見を挟みながら説明させていただきます。スクリーンをご覧ください。九州北部域の古代山城群と鞠智城を含めた位置を確認するため、東シナ海上空から東を俯瞰してみました。(図4)

有明海の奥には北部九州の古代山城群、さらに奥の方には瀬戸内海の古代山城群ることができます。赤い印をつけているところが鞠智城です。

東シナ海から島原半島を回って有明海に入り北に進むと、現在の筑後川の河口部に行きあたります。そこには神籠石系の古代山城であるおつば山神籠石、帶隈山神籠石、高良山神籠石そして女山神籠石が山地や丘陵を背にして点在しています。もし、外敵が有明海から熊本平野に直接上陸してくる場合には、おそらく鞠智城が対応することになると思いますが、有明海を北上していった場合、筑紫、当時は大宰府があつた方面に進まれた場合には、帶隈山神籠石とか高良山神籠石といった神籠石系の古代山城が正面ということになつてくるかと思います。

鞠智城は熊本平野に上陸された場合は先ほど言いましたように、

鞠智城が外敵への対応をすることになりますが、鞠智城の立地を考えると、熊本平野と筑紫平野両方へ上陸された場合でも、両面で対応できたらと考えます。基肄城以南には朝鮮式山城と定義される城は鞠智城しかない。そのような環境下におかれた鞠智城には、大野城・基肄城ほどの緊張感はないにせよ、城としての規模や機能など役割が与えられていましたと考えます。鞠智城は大宰府から離れた地域にあ

鞠智城と有明海

有明海から見た北部九州の古代山城群

- ・東シナ海から有明海に進入する正面に熊本平野が所在し、平野を望む低丘陵上に鞠智城が所在。
 - ・有明海に進入し北に転ずると筑紫平野が所在し、平野を望む背後の低丘陵上にはおほぼ山・常隈山・高良山・女山の各神籠石系古代山城群が所在。
 - ・鞠智城は、熊本平野付近に上陸した場合には最前線としての基地、筑紫平野に上陸した場合にはその支援を行う城として、私は守る面と攻める面との両方の機能を併用した「押し出しの城」を提唱する小田先生の說を支持したい。



4

りますが、軍事基地としての城の機能を備えている以上は、そいつた機能があつたと思います。

一番下に赤で書いていますが、私は、基本攻めてきたら守り戦う、そして筑紫平野に上陸しされた場合はそちらを支援する、そして普段は兵站基地としての肥沃な穀倉地帯である熊本平野を背景に、兵站基地としての役割を担う、これが鞠智城だつたと考へています。おそらく当時のヤマト政権においても主戦場は大宰府方面を想定していたと考へます。その背後になる肥後北部地域には様々局面で対応が可能な、朝鮮式山城としての規模と機能を有する鞠智城が築城されたのではないかと考えています。

これらのことから考へますと、小田先生が提唱される「守る」と「攻める」両方の機能を持たされた押し出しの城との考え方が鞠智城の役割りには一番しつくりくるのかなと考へています。

三 鞠智城調査研究の成果

続きまして、これまでの鞠智城の調査研究の成果について説明します。鞠智城は五期にわたる変遷がこれまでの調査と研究の中で分かってきています。創建期（Ⅰ期）、隆盛期（Ⅱ期）、転換期（Ⅲ期）、変革期（Ⅳ期）それから終末期（Ⅴ期）に整理されています。

創建期・鞠智城Ⅰ期（図5）

まず、鞠智城の創建期です。七世紀後半に城としての最低限の機能を整備し、そこに駐屯する兵士が起居する

兵舎であるとか、城の中の水源としての貯水池、土塁と城門などの整備がなされていったのと考えています。小田先生のお話しにもありました、が、鞠智城には土塁構築に、「版築」と呼ばれる技術、これは当時最先端の技術ですが、渡来系の方々によりもたらされた技術あります。他に貯水池の堤に使われた「敷粗朶工法」と呼ばれる技術、水城（福岡県太宰府市ほか）でも使われています。このような最先端の技術が幾つも使われ、まず、城としての整備が図られた時期。これが創建期になります。

隆盛期・鞠智城Ⅱ期(図6)

続きまして隆盛期です。鞠智城の最も栄えた時期と言われている時期になります。「鞠智城跡Ⅱ期の建物」に青く塗りつぶして示していますが、長者原地区において多くの建物が建てられるのにあわせ、同地域の北東には細長い建物を「コ」の字形に並べた建物群があります。これは官衙的な建物、当時の役所に近い建物と考えられるなど、建物が充実していくた時期になります。この当時、八角形建物、鞠



図 6



智城のシンボル的な建物として復元しておりますが、こういった建物もつくられた時期になります。

転換期・鞠智城Ⅲ期（図7）

- 施設の拡充。『続日本紀』689年にみられる大野城、基肄城、鞠智城の「縁治」に該当。
- 「コ」の字型掘立柱建物群、朝鮮半島に由来する“八角形建物”的建設。
- 土器の出土量も最も多いことから、鞠智城の機能が充実した時期。

続きまして転換期です。八世紀前半から中頃にかけての時期になります。鞠智城の建物は地面に穴を掘って柱を建てる掘立柱建物が最初に建てられるのですが、この時期には、小型の礎石の上に柱を建てる礎石建物へと転換していきます。この礎石建物への構造的な変化は、建物を長持ちさせるためと考えられます。

また、転換期には、貯水池から木簡が出てきております。「秦人忍□（米カ）五斗」と書かれていますので、鞠智城内に米を貯蔵し始めた時期なのかな、とも思います。荷符木簡が付けられた米が持ち込まれ、礎石建物によつて米が備蓄される、そういう仕組みが分かってくる時期になつております。

ここで途中ですが、ここ大事なところです。スクリーンの右半分には、鞠智城の土器の出土量と組み合わせを、時期ごとに図示しま

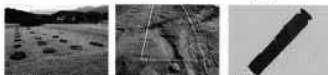
転換期

鞠智城Ⅲ期

礎石建物が建てられはじめるなど建物の様相に変化が見られる。



■ 勘智城跡Ⅲ期の建物



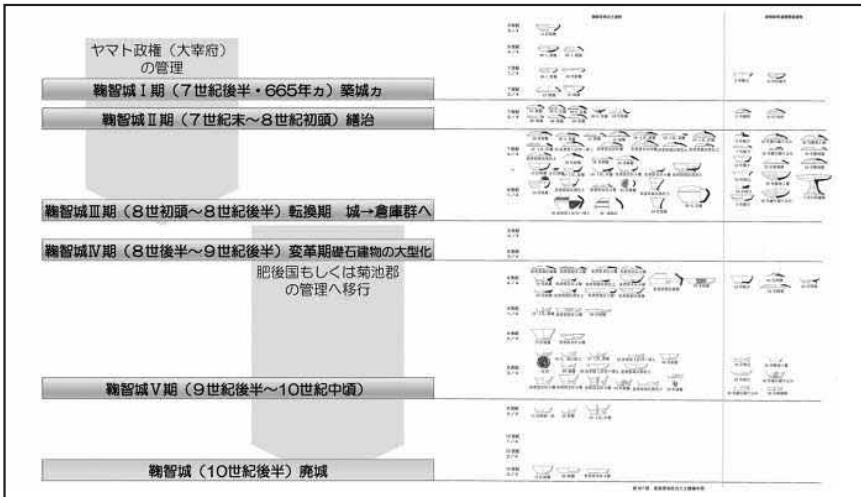
■ 49号建筑物

■ 63号建物

■ 本面

- ・掘立柱建物から、小形礎石建物へと変化が始まる。
 - ・土器の出土数が減少し、城を管理する最低限の員数しか配置されていない。
 - ・貯水池跡出土の木簡は当該期のもの。大宰府や平城京で出土する西海道関連の木簡形状に類似。
 - ・大宰府管理のもと最低限の維持管理の状態か。

图 7



8

した。(図8) 鞠智城Ⅰ期からⅡ期までは、土器が非常に多く出てきます。どんどん増えていく、右肩上がりで出土してきますが、その後は激減し、空白ともいえるⅢ期をおいて、また八世紀後半から増えてくる。最終的には十世紀後半に廃城になります。このような形で並べてみると、鞠智城への人の出入りや、鞠智城がどう整備されていたのかの動向をうかがえる資料になっています。

変革期・鞠智城IV期(図9)

それでは統いて変革期です。八世紀中頃から九世紀の中頃にかけてです。先ほど小型の礎石建物が増えて転換が図られたと言いましたが、この後、今度は礎石が大型化していきます。そして礎石建物の倉庫が建ち並ぶ時期になつてきます。

鞠智城Ⅲ期までは官衙的、役所的な機能を備えていたのではない
か言つていましたが、そのような建物がなくなり、倉庫が建ち並ぶ
風景が鞠智城に広がっていきます。そして、この時期の『文徳実録』
には、「礎石建物が燃えた、不動倉十一宇が焼失した」という記事が



図 9

出ています。長者山、長者原地区の発掘調査では焼米が大量に出土していますが、そういった米を貯蔵する倉庫としての機能が充実していると思います。さらに出土する土器が須恵器を中心とした広域に流通する、牛頸窯跡群や八女古窯跡群（福岡県）の須恵器が鞠智城で減少し、替わりに肥後国内で作られる須恵器や土器の出土量が増加する時期になっています。この時期を境に鞠智城が、大宰府の管理から肥後国もしくは菊池郡の管理に移つていつたのではないかと考えられます。このように、鞠智城にとつては大きな変化があつた時期と考えています。

終末期・鞠智城V期（図10）

続いて、鞠智城の終末期です。九世紀中頃から十世紀中頃までです。

この時期には『日本三代実録』に、「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」「肥後国菊池城院兵庫の戸が自ら鳴る」など、怪奇現

象の記事の報告が増加します。このように管理の面からも不安定な時期を迎えた鞠智城では、建物群も徐々に減少し、土器の出土量も



図 10

減少を始めます。創建期からありました貯水池も、下流側から埋まり始め最終的に十世紀に入るとその利用は低下していきます。最終的には、貯水池が管理されなくなった十世紀の第三四半期頃に鞠智城は終焉を迎えます。

四 おわりに

今まで鞠智城は非常に長く調査されてきましたけれども、簡単に早足で見ていくと、このような五期の遷り変わりの中に調査成果を収めていくことができます。

私の資料には「これから鞠智城研究」と題して「鞠智城の範囲についての検討」、「鞠智城に関連する周辺遺跡の研究」及び「鞠智城出土文字史料と菊池郡内の墨書き土器等研究」を載せております。これは後程シンポジウムの中で、小田先生のご意見も伺いながら、言及していきたいと思います。

歴史公園鞠智城・温故創生館からの報告は、これで終わらせていただきます。